

日本語の疑問文と「か」と「も」

外池滋生

1 はじめに

大野晋(1993)は係助詞に疑問詞、すなわち Kuroda(1965)が未定詞(indeterminate)と呼ぶ要素、を受けるモ・ゾ・カと、そうでないハ・コソ・ナム・ヤの二系列があることを指摘している¹。以下は大野からのモ・ゾ・カの例である。

- (1) a. 何時の間も神さびけるか(万葉集 2 5 9)
- b. いくつの恋そ摺みかかれる (万葉集 6 9 5)
- c. いずれの時かわが恋ひざらむ (万葉集 3 8 9 1)

この3つの助詞のうち、ゾは現代日本語では用法が限られているが、カとモは現代日本語においても、疑問詞との関わりに関して、いくつかの興味ある特性を共有している。本稿では、その共通性と未定詞との関わりから、統一的な分析を試みる。

2 その他の共通性

2.1 数量詞(quantifiers)と論理結合子(logical connectives)

次の英語との比較からカとモは some と every/any に対応しており、その意味で、それぞれ存在数量詞、全称数量詞であると考えられる。

- (2) a. 誰かが来た a'. Somebody came.
- b. 誰もが来た b'. Everybody came.

より詳細に見ると、次の対応関係がある。

- (3) a.

誰	か
└───┬───┘	
- b.

誰	も
└───┬───┘	
- c.

some	body
└───┬───┘	
- d.

every	body
└───┬───┘	

¹ 日本語研究者の間では indeterminate の訳として「不定詞」が使われるようであるが、infinitive との区別がつかないので、「未定詞」という訳語を使うことにする。

つまり、日本語の未定詞「誰」と英語の **body** が指示対象を人に限定するという意味で制限子 (**restriction**)として働き、カ/**some** が存在数量詞、モ/**every** が全称数量詞として働いているということが分る²。

この点にはいくつかの問題点もある。まず、(2)の例は現代日本語として比較的安定しているが、すべての未定詞がカとモを加えることで数量詞として働くわけではない。(日本語と英語との間で最も規則的な対応関係をしめすのは(6)の「何処」=**where** である。

(4)	a.	誰かが	誰かを	誰かに	誰かの	somebody
	b.	誰もが	*誰も ³ を	*誰も ⁴ に	*誰も ⁵ の	everybody
(5)	a.	何かが	何かを	何かに	何かの	something
	b.	*何もが	*何もを	*何もに	*何もの ⁶	everything
(6)	a.	何処かが	何処かを	何処かに	何処かの	somewhere
	b.	*何処もが	*何処もを	*何処も ⁷ に	*何処もの	everywhere
(7)	a.	*何時かが	*何時かを	*何時かに	何時かの	sometime
	b.	*何時もが	*何時もを	*何時もに	何時もの ⁸	every time

このように、特にモに関してパラダイムは不完全であり、注に記したように多くの補充 (**suppletion**)が見られるが、全体としてカが存在数量詞としての働きをしていて、モが全称数量詞の働きをしていることは明らかであろう。また日本語ではすべて未定詞との組み合わせであるが、英語では、疑問詞との組み合わせは **where** との場合のみで、この他にわずかに **somewhat, somehow** が少し意味の変容を伴って残っている⁹。

2.2 論理結合子

カとモには論理結合子(**logical connectives**)、つまり等位接続詞(**coordinating conjunctions**)と

² そうなると変項は何にあたるのかが問題となるが、筆者は「誰かが」「誰もが」に含まれる格助詞「が」が決定詞(**Determiner**)であって、これが変項として働いていると考えている。Tonoike (2011, 2013)参照。

³ 代わりに「どの人も」が用いられる。

⁴ Cf. これに対し「誰にも」は可である。

⁵ Cf. 「誰の X も」は可である。下の「*何もの」「*何処もの」に対して、「何の X も」「何処の X も」は可である。

⁶ 「何も」の系列はいずれも不可で、「どの X...も」の形が用いられる。

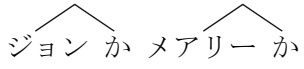
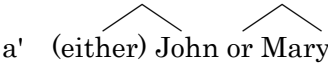
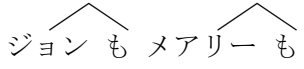

⁷ 但し「何処にも」は可。

⁸ 但し、副詞的に使う場合は「何処か」「何処も」「何時か」「何時も」すべて可である。

⁹ 古英語(**Old English**)では現代英語の **who** に相当する **hwa** が **what/who** の意味の他に **something/somebody** の意味を持っており、現代英語の **which** に相当する **hwilc** が **what/some** の意味で、疑問数量詞と存在数量詞をかねており、これらに相当する全称数量詞は **gehwa, gehwilc** であった。このことは、古英語では **ge-**が日本語のモに対応することを示唆しており、興味深い。

(i) **ge-hwa** 誰も
ge-hwilc X どの X も

して、英語の選言 (disjunction) の or と英語の連言 (conjunction) の and に対応しているという共通点もある。

- (8) a.  a'. 
 b.  b'. 

日本語ではカもモも被接続項それぞれに一つずつ現れうるのに対して、英語では*and John and Mary とか、*or John or Mary は許されないが、上に示すように代わりに either/both が現れる。同じ等位接続詞を重ねて使うことは例えば (古い) フランス語では可能である。

- (9) a. (et) Jean et Marie
and John and Marie
b. (ou) Jean ou Marie
or John or Marie

ここまでをまとめるとカとモには次の3つの共通性がある。

- (10) a. 未定詞に接続する。
 b. カ=some モ=every
 c. カ=or モ=and

このことはカとモは最も基本的な論理結合子の or, and, not のうち、2項以上を結合することができる or と and と同じ働きがあるだけでなく some と every という最も基本的な二種類の数量詞と同じ働きがあるということである。

- (11) a. カ=some= \exists モ=every= \forall
 b. カ=or= \vee モ=and= \wedge

存在数量詞と選言、そして全称数量詞と連言が、共通の性質を持っていることについては豊かな研究の歴史がある¹⁰。それが、現代英語では主に some と or、every と and という語源的にも

¹⁰ この点については Lakoff (1974) およびそこで言及されている先行研究を参照。特に興味あるのはそこで引用されている以下の McCawley の観察である。

- (i) a. To hell with Lyndon Johnson and Richard Nixon.
 b. *To hell with Lyndon Johnson or Richard Nixon.
 (ii) a. To hell with everyone.

異なる語が担っているのに対して、日本語ではカが存在数量詞としても選言としても働き、モが全称数量詞としても連言としても働くことは偶然とは考えがたい。

2.3 WH 疑問文/WH 譲歩文

さらにカとモには二つの共通点がある。一つは未定詞に接続して用いられる場合の他に、未定詞と関連しながら、これとは離れた位置に生じる場合である。次の例を対応する英語の例と比較されたい。

- (12) a. 君が何処へ行くか (知りたい)
a'. (I want to know) where you are going.
b. 君が何処へ行ってもも (見つけ出す)
b'. Wherever you go, (I will find you)

(12a)はいわゆる WH 疑問文で、(12b)は譲歩文であるが、それぞれ(12a')(12b')という英語の文に対応している。ここで特筆すべきことに、英語の例ではどちらの場合もいわゆる WH 移動で、where(ever)が節の左端に移動しているが、それに相当する日本語の例ではカとモが疑問節/譲歩節の右端にある。この事実を捉える最も直裁的な方法は、両言語において WH 移動が適用しており、英語では where(ever)が左方向へ移動され、日本語においてはカとモが右方向へ移動されているとすることである。

- (13) a. 君が何処へ 行くか (知りたい)
a'. (I want to know) where you are going .
b. 君が何処へ 行ってもも (見つけ出す)
b'. (I will find you) wherever you go ,

これが正しければ、Tonoike (2000)および外池(2013)が提案する日本語にも WH 移動があり、

- c. *To hell with someone.

To hell with X という表現の X の部分には(i)で分る通り、and で等位接続されたものは用いることができるが、or で等位接続したものは用いることができない。(ii)はその同じ位置で、全称数量詞 everyone は用いることができるが、存在数量詞 someone は用いることができない。

日本語でも同様のことが成り立つように思われる。

- (iii) a. 山田も田中もクソッ食らえ
b. *山田か田中かクソッ食らえ
(iv) a. どいつもクソッ食らえ
b. *誰かクソッ食らえ

つまり、連言としてのモと全称数量詞としてのモはいずれも、「クソッ食らえ」のような悪態の中で使うことができるが、選言としてのカと存在数量詞のカはいずれもそのような表現の中では使えないので、これは追加的なカとモの共通の性質と言える。

さらに日本語のカとモとの関わりでは、Shimoyama (2011), Kratzer and Shimoyama (2002), Szabolsci (2013) などの研究がある。

それはカの疑問節の文末への移動であるとする分析に加えて、モの移動も WH 移動であるということになる。カとモが日英語の比較においてただならぬ関係にあることからして、これは日本語における右方 WH 移動分析のさらなる根拠であると言える。

2.4 比較構文

カとモにはもう一つ、共通性がある。それは次に示すように、比較構文において、やはり同じ位置に現れることである。

- (14) a. (矢は) 飛んでいると思ったよりカ／モ遠くへ飛んだ
b. (The arrow) flew farther than I thought it would have flown.

(14b)に見られるような比較構文は Bresnan (1973)では削除の結果であるとされたが、Chomsky (1977)以降、島の制約に従うことから、空演算子（音のない関係詞）の移動であるとされている。この WH 移動の分析にはいくつかの可能性があるが、筆者は関係節の分析とともに、次のような取り出しが生じていると分析するのが正しいと考えている。(C は関係節を導く補文標識)

- (15) a. [C I thought the arrow hit the target]
b. [CP the target [C I thought the arrow hit ~~the~~]]
c. [DP the target [CP the [C I thought the arrow hit ~~the~~]]]
d. [DP the target [CP which [C I thought the arrow hit ~~the~~]]]¹¹
(16) a. [than I thought it would have flown farther]
b. [CP farther [than I thought it would have flown ~~far~~]]
c. [AdvP farther [CP than I thought it would have flown ~~far~~]]

(15)の関係節では、まず、関係節を導く補文標識 C の指定部に関係節中から「先行詞」となるべき **the target** が取り出される(15b)。(その折に、もとの位置に音のない決定詞のコピー~~the~~を残す。)次にその指定部から、「先行詞」の DP が定決定詞 **the** のコピーを残して取り出され、同時に CP は先行詞 DP に付加される(15d)。CP 指定部に残された **the** のコピーは関係代名詞 **which** として実現される(15d)。関係節中に残る ~~the~~ と先行詞についている **the** とは同じ定決定詞のコピーであり、この同一性が関係節中の **hit** の目的語と先行詞との同一性を保証する。

比較構文でも同様のことが生じると提案したい。比較構文は補文標識 **than** により導かれる。**than** は取り出すべき比較表現を探し、**farther** を見つけ、これをその指定部に取り出す(16b)。その後音のない原形のコピー~~far~~を残す。その後 **farther** がさらに取り出されてそれに関係節が付

¹¹ 補文標識に音形のある **that** が用いられると関係代名詞は発音されず、**the target that the arrow hit** が得られる。

加される(16c)。~~far~~と farther に含まれる far は同じもののコピー同士であるので、同じ形容詞の比較が行われているという事実が捉えられる¹²。

これに対して日本語の比較構文の例は次のように分析できる。関係節の分析とあわせて提示する。

- (17) a. [矢が的に当たったと思った C]
b. [[矢が~~に~~当たったと思った C]的 D_{CP}]
c. [[矢が~~に~~当たったと思った C]_{CP}] 的 D_{DP}]
- (18) a. [矢が遠くへカ/モ飛んだと思ったより]
b. [[矢が遠くへ飛んだと思ったより]遠くへカ/モ]
c. [[矢が遠くへ飛んだと思ったより]カ/モ] 遠くへ

日本語の関係節を導く音形のない補文標識 C は先行詞となる DP を探し、「的に」を見つけて、その決定詞のコピーを音形のない形「~~に~~」で残して、まだ音形の定まらない決定詞 D とともに指定部に取り出す(17b)。さらにそこから先行詞「的 D」を取り出して、これに関係節全体が付加することによって関係節化が完了する(17c)。D はこの後、この DP に付与される格により、主格「が」、対格「を」、与格「に」、属格「の」などとして実現される。二つの決定詞が同じ決定詞のコピーであることが関係節内の目的語と「的 D」の同一性を保証している。

比較構文は「より」という補文標識により導かれるが、比較される「形容詞／副詞」などにはカ/モにマークされている。「より」はカ/モにマークされているものを探し、全体をその指定部に移動する(18b)。その折に形容詞／副詞の音のないコピー「遠くへ」が残される。指定部に取り出された「遠くへ」はさらに、カ/モを残して取り出され、これに比較節が付加される(18c)。二つの「遠くへ」のコピーが、意味の同一性を保証する¹³。

この分析が基本的に正しい方向にあれば、ここでも、英語における WH 移動（すなわち CP 指定部への移動）が関与している比較構文においてもカ/モの移動があるということになる。

3 共通性のまとめ

以上見てきたように、日本語のカとモには、都合 4 つの共通点がある¹⁴。

- (19) a. 疑問詞（未定詞）に接続する
b. 疑問詞（未定詞）に接続して存在数量詞／全称数量詞をつくる

¹² さらに抽象的に、取り出される farther は目に見えない決定詞を伴っているという分析も大いに可能性があり、そうなれば関係節と比較構文の間の共通性はより高まる。

¹³ この場合も決定詞 D が関係するとする、より抽象的な分析が考えられるが、それについては今後の研究課題としたい。

¹⁴ 悪態表現に関して同じ性質を示すとする点を含めると 5 つになる。

カ=some= \exists モ=every= \forall

c. それぞれ選言(disjunction)と連言(conjunction)を表す。

カ=or= \vee モ=and= \wedge

d. WH 疑問文と WH 譲歩文においては、WH 移動により未定詞から引き離されてそれぞれの節の右端に移動する。

e. 比較構文でも WH 移動により比較節の右端に移動する。

カとモにこれだけの共通性があることは明らかに説明を要する。特に(19b)と(19c)は特筆すべき事実であると思われる。英語では some/every と or/and には形態的な共通性がないが、それでも論理学者はこれらの中に共通性を認め、その統一的な扱いを試みてきた¹⁵。他方(19d)(19e)は移動が関与していることについても統一的な扱いの中で処理するのが望ましい。

4 理論的統合

4.1 数量詞と論理結合子

理論的統合の第一の標的は数量詞と論理結合子、英語で言えば、some/every と or/and である。抽象的にどのような論理的表記法(notation)を採用するかを考えるよりも、日本語におけるカとモを含む表現に沿って考える方が実りが多い。

- (20) a. 誰かが 誰もが
b. ジョンかメアリーかが ジョンもメアリーもが

カを \vee 、モを \wedge と捉えたと、次のように表すことができる。

- (21) a. 誰 \vee が 誰 \wedge が
b. ジョン \vee メアリー \vee が ジョン \wedge メアリー \wedge が

このことはカ(\vee)もモ(\wedge)も、(21b)のように複数の個体(individuals)を項として結合するだけでなく、(21a)のように集合を項としてとる要素であると考えれば良いことを示唆している。つまり、「誰」のような未定詞は文脈により定義される「人」のような特定の特徴を持った要素の集合 $\{p_1, \dots,$

¹⁵ 例えば Lakoff (1974: 278)は次のような記述法をあげている。

- (i) a. $\wedge_{x} fx$ b. $\wedge p_1, \dots, p_n$ 数量詞
(ii) a. $\vee_{x} fx$ b. $\vee p_1, \dots, p_n$ 結合子

しかし、Lakoff は同時に両者の間で一方が他方に還元されているという形になっていないという問題点も指摘している。

p_n を表すから、(21a)は(22a)のように表すことができる。また、(21b)もジョンとメアリーという個体からなる集合{J, M}を扱っているから、(22b)のように表すことができる¹⁶。

- (22) a. $\{p_1, \dots, p_n\} \vee$ が $\{p_1, \dots, p_n\} \wedge$ が
b. $\{J, M\} \vee$ が $\{J, M\} \wedge$ が

このように考えれば、カもモも集合を項とする一項述語（あるいは一項関数）として扱うことができる。日本語で必要なことは、(22b)で \vee/\wedge を分配して、(21b)を導けばよい。こうすればカ(\vee)は集合の成員のどれかについて、そしてモ(\wedge)はそのすべてについて、当該の命題が成り立つことを意味するから、数量詞の場合の、(22a)でも、結合子の場合の(22b)でも、同じ扱いができる¹⁷。さらに、未定詞を項としてとるという共通点(19a)も、集合を項として取るということで、結合子としての性質から導くことができる。

またこのように考えるとカとモの意味は与えられた集合に対して、次のような操作を行うものと捉えることができる。

- (23) a. か 「一つを選べ Pick one」
b. も 「すべてを/どれでも選べ Pick all/any」

ここから存在数量詞、全称数量詞の意味が出てくると考えることができる。

4.2 WH 移動

(19d-e)の移動の共通性は結合子としての性質から導くことはできない。何らかの移動を駆動する要因が必要である。対応する英語の例はいずれも WH 移動が関与していることから、日本語での WH 移動のあり方が問題になる。Tonoike (2000)、外池(2013)では次のような提案をした。

日本語でも英語同様 WH 移動があるが、それは焦点(Focus)要素であるカ文末 (CP 指定部)への移動である。また、英語の WH 移動においても同じく Focus の移動であるが、Focus に音形がないので、WH 句全体が移動される。日本語においても英語においても（そして恐らくはすべての言語において）、WH 移動は、何が WH 疑問文の焦点であることを明示することと、WH 疑問文の始まり/終わりを示すことである。

この分析を WH 譲歩文にも拡大し、Focus を素性(feature)として扱おうと次のようにまとめられる分析が可能になる。

¹⁶ 以下のような両者の還元の方向性は、青山学院大学大学院生、田邊正行氏(p.c.)の示唆による。

¹⁷ 文を結合するときも、疑問文と譲歩文の違いがあるが、カもモも同じ性質を示す。

(i) a. ジョンが来るか、メアリーがくる (か)
b. ジョンが来ても、メアリーが来ても

- (24) a. 日本語ではカとモは焦点素性 Φ (大文字の ϕ)を任意にもつ。
英語では Φ は音形を持たない。
- b. 焦点素性を持つ要素は、疑問詞を含む何らかの句の指定部に生じることにより、その疑問詞をその(c 統御)領域に持たなければならない。
- c. 焦点素性はその作用域を示すために CP の指定部に移動しなければならない。日本語では右に、英語では左に移動する。
- d. 日本語ではカとモという音形があるので、これが移動するが、英語では、 Φ は音形がないので、それが指定部を占める句全体が移動する。

説明の都合上まず英語から例示を始める。(12a') (12b')の従属節は次の派生を辿ることになる。
(25)では助動詞のCへの移動の段階から示している。

- (25) a. where are you going
b. [CP C-are you going [Φ where]]
c. [CP [Φ where] C-are you going]
- (26) a. wherever you go
b. [CP C you go [Φ wherever]]
c. [CP [Φ wherever] C you go]

いずれの場合でも Φ が where/wherever の指定部にあり、これを移動するためには音を伴わねばならず、音を伴う最小の要素が移動されている。

前置詞句に WH 要素が含まれる場合には、 Φ が DP の指定部を占めるか、PP の指定部を占めるかによって区別できるということからも、 Φ のような要素が必要なことが分る。

- (27) a. [Φ who] did you go with?
b. [Φ with whom] did you go?

日本語の(12a), (12b)は次のような派生を辿る。

- (28) a. [[何処へ $\underline{か}$]行く C] (分らない)
b. [[何処へ]行く C $\underline{か}$]
- (29) a. [[何処へ $\underline{も}$] 行って C] (つまらない)
b. [[何処へ] 行って C $\underline{も}$]

Φを含むカとモは、「何処へ」という句の指定部を占めており、その領域内に WH 要素「何処」を持っている。カとモは音形があるので、単独で、それぞれの指定部に移動し、(28b)(29b)を生じる。

さらに、カとモは (30a)(31a)に示すように、未定詞との関連がなくとも使える。この事実を扱うにはカとモは(30b)(31b)のように疑問詞以外にも接続し、そこから移動を受けるとするのが自然である。

- (30) a. パーティに行くか (分らない)
- b. [[パーティにか]行く C]
- (31) a. パーティに行っても (つまらない)
- b. [[パーティにも]行って C]

この場合興味深いのは英語との対応関係である。(30a)(31a)に相当する英語表現は(32b)(33b)である。

- (32) a. [パーティーに行く]C か]
- b. [if you are going to the party]
- c. [whether C you are going to the party]
- (33) a. [[パーティーに行って C]も]
- b. [even if [you go to the party]]

(32a)に対しては、if と whether を用いる二通りの表現が対応している。それに対して、(33a)に対しては even if を用いる表現が対応している。このことを焦点素性Φとの関係で考慮すると次のような分析の可能性が示唆される。

- (34) a. [パーティーにかΦ行く]C]
- b. [if you are going to Φ the party]
- c. [(*if) you are going Φ whether to the party]
- (35) a. [[パーティーにもΦ行って C]]
- b. [if [you go Φ even to the party]]

(32a)(33a)の日本語ではいずれもカΦ/モΦという焦点素性を持った要素が補文標識 C の指定部に移動する。(32c)と(33b)では、Φをもった whether と even が補文標識 if の指定部に移動しているが、whether が移動してくる場合には if は発音されないのは、いわゆる Doubly-Filled Comp と呼ばれる現象である。説明されるべきは(32b)の場合であるが、英語では wh を伴わない場合は移

動する必要がないと考えればよい。WH が関わる(25)(26)の対応関係は明らかであるが、非 WH 版である(32b)(33b)の両方に if が出てくることも偶然ではないように思われる。

しかし、これだけでは疑問と譲歩の意味論が充分扱えていない。なぜ、日本語でも英語でも疑問／譲歩の時に WH 移動が生じるのであるかという根本的な疑問が残っている。また、そのように考えると焦点を表す素性 Φ が CP の指定部にまで移動して来てしまうと、この素性の痕跡を残すということをしてしない限り、LF 表示で何が焦点であるのかが分からなくなってしまうという問題も生じる。 Φ の痕跡を残すというのは、定決定詞のコピーを残すというのと同列に扱えない。後者ではそれが同一指示を捉え、かつ演算子-変項構造をとらえる唯一の方法であったが、 Φ 素性にはそのような必要性はない。

そこで、疑問節／譲歩節には焦点の Φ という素性の他に疑問／譲歩を表す素性 Q が関与していると提案する。日本語では Φ と Q はいずれもカ／モの中に含まれて疑問の対象の句の指定部に生じ、疑問／譲歩をの C の位置まで移動するが、そのとき Φ はもとの位置にとどまると仮定する。

- (36) a. [[何処へか ΦQ]行く C] (分らない)
b. [[何処へ Φ]行く C か Q]
- (37) a. [[何処へも ΦQ] 行って C] (つまらない)
b. [[何処へ Φ] 行って C も Q]
- (38) a. [[パーティにか ΦQ]行く C] (分らない)
b. [[パーティに Φ]行く C か Q]
- (39) a. パーティにも ΦQ]行って C]つまらない
b. [[パーティに Φ]行って C も Q]
- (40) a. [CP C-are you going [Q Φ where]]
b. [CP [Q where] C-are you going Φ where]
- (41) a. wherever you go
b. [CP C you go [Q Φ wherever]]
c. [CP [Q wherever] C you go [Φ where]]

まず(36)の WH 疑問文では文脈から特定される「何処へ」に相当する行き先の集合のなかから何か一つを選べというのが WH 疑問文の意味論であると捉えれば、それは選言のカ(V)から自然に導けるように思われる。(37)の WH 譲歩文では、文脈により定義される可能な行き先の「どれでも選べ Pick any」というモノ \wedge 連言の働きから導けるように思われる。

yes/no 疑問文の(38)についても、「パーティーへ」を行き先を選ぶことの許可を求めていると解釈できるし、(39)の譲歩文も、文脈上定義されるすべての行き先の中で、最もありそうもないものをあげて、これを含めて、すべてを選んでよいということを述べているとすれば、モがもっている even の解釈を捉えることができる。

(40)-(41)の英語の例でも、QはPick one/anyの働きを持ったV/Λで、これがCの指定部に来るとPick one/anyの依頼/許可を行うものと捉えることができる。もとに位置にΦが残ることにより、疑問/譲歩の焦点が何であるかということがLFにおいて表示され、さらにはPFにも焦点を示す対比強勢として実現されると考えることさえあながち間違いでもないように思われる。

そのような観点から次の(42a)(43a)を(42b-c),(43b-c)を比較してみよう。

- (42) a. 君はパーティに行くのか
b. 君はパーティに行くのか、行かないのか？
c. 君はパーティに行くのか、どうなのか？
- (43) a. Are you going to the party?
b. Are you going to the party, or not?
c. Are you going to the party, or what?

(42a)の代わりに、詰問調になるが、(42b-c)のように言い換えても基本的な質問の意味は変わらない。そのことは日本語のyes/no疑問文というのも、英語の(43b-c)のような選択疑問文と基本的には同種のもので、中国語の正反疑問文とも通じるものであることが伺われる。

4.3 比較構文

比較構文でも比較の対照となる要素が焦点素性を持つということは理にかなっているように思われるが、されに加えて、英語においては(WH)移動が関与していることと連動して、日本語ではモトカが現れるという共通点があるばかりでなく、日本語と英語との間にも興味ある共通点がある。それは、英語の比較構文においても、モに対応するandとカに対応するorが自由に交替し、また、モに対応する全称数量詞everythingとカに対応する存在数量詞anythingも自由に交替する。以下はまたLakoff (1974: 279)がRobin Lakoffからのp.c.として引用している例である。

- (44) a. Sam likes lox more than herring and whitefish.
b. Sam likes lox more than herring or whitefish.
- (45) a. Sam likes canned sardines more than everything his wife cooks.
b. Sam likes canned sardines more than anything his wife cooks.

全く同じではないが、日本語の比較構文でも、モトカが自由に交替する。

- (46) a. サムはニシンよりもサケが好きだ
b. サムはニシンよりかサケが好きだ
- (47) a. サムは何よりもサケが好きだ

- b. サムは何よりかサケが好きだ

比較構文で比較の対象が **and/モ** で接続できるのは、接続されたものすべてよりということから当然のことであるが、**or/カ** で接続できるのは、選択肢のいずれをとっても比較文が成り立つという事情によると思われる。

4. 4 まとめ

以上をまとめると、次のようになる。カとモはそれぞれ選言(\vee)、連言(\wedge)であるが、それが選択する要素（生成文法で言う補部）の種類（すなわち未定詞が表す集合であるか、個体を集めた集合であるか）と、焦点素性 Φ と疑問素性 Q を含むかどうかにより4つに分かれる。まず、 ΦQ を含まない場合は次のような関係になっている。

(48)	補部の種類	カ	モ	
a.	未定詞	\vee (or)	\wedge (and)	結合子
b.	(複数)個体	$\vee = \exists$ (some)	$\vee = \forall$ (every)	数量詞

焦点要素 Φ と疑問素性 Q を含む場合は次のような対応を示す。

(49)	補部の種類	カ	モ
a.	未定詞 (WH 疑問節)	$Q\Phi \vee$ (wh-) (WH 譲歩節)	$Q\Phi \wedge$ (wh-ever)
b.	個体 (非 WH 疑問節)	$Q\Phi \vee$ (if) $Q\Phi \wedge$ (=even if) (非 WH 譲歩節)	

つまり、カとモは基本的には \vee と \wedge であり、それが個体を補部としてとると \exists と \forall として機能し、この選択と独立に焦点素性 Φ および疑問素性 Q をもつと、それぞれの節の右端の指定部に移動する。これに対して英語では、それぞれの場合に **or/and/some/every**/などと異なる形態をもつ。

さらに、節の最後に生じるカもモも、その位置で選言、連言の働きを維持していることが次のような例から伺い知れる。

- (50) a. 京都へ行くか、奈良へ行くか(分らない)
b. 京都へ行っても、奈良へ行っても (構わない)

5 結論

以上、カとモは古代から現代に至るまで、並行的な性質を示すが、それらすべては次の三つの

仮定から導くことができる。¹⁸

- (51) a. カは選言(\vee =or)で、モは連言(\wedge =and)である。
b. カとモは、集合=未定詞も、個体も、補部として取ることができる。
c. カとモは共に焦点素性 Φ および疑問素性 Q を含むことができる。

参考文献

- Bresnan, Joan (1973) "The Syntax of Comparative Construction in English" *Linguistic Inquiry* 4, 275–343.
- Chomsky, Noam (1977) "On WH-Movement." In: Peter Culicover et al. (eds.) *Formal Syntax*. New York: Academic Press. 71–132.
- Kratzer, Angelika and Junko Shimoyama (2002) "Indeterminate Pronouns: The View from Japanese". In Yukio Otsu (ed.) *The Proceedings of the Third Tokyo Conference on Psycholinguistics*
- Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. Doctoral dissertation, MIT.
- Lakoff, George (1974) "On Generative Semantics" In Danny D. Steinberg (ed.) *Semantics: an Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*. pp. 232-296. Cambridge University Press, Cambridge, UK.
- 大野晋(1993) 『係り結びの研究』岩波書店
- Shimoyama, Junko (2011) "Indeterminate Phrase Quantification in Japanese" *Natural Language Semantics* 20(19:83-113).
- Szabolsci, Anna (2013) "Quantifier particles and Compositionality" *Pre-proceedings of the 19th Amsterdam Colloquium*.
- Tonoike, Shigeo (2000a) "Wh-Movement, Pied-Ping and Related Matters."『平成 11 年度 COE 形成基礎研究費研究成果報告 (4)』(課題番号 08CE1001) 211-227. 神田外語大学言語科学研究科.
- Tonoike, Shigeo (2000b) "An Operator Subject Analysis of Japanese Sentences and Noun Phrases—LF Representation of *Wa*, *Mo*, *Ga*, and *No*—." *Keio Studies in Theoretical Linguistics II*, 205-271. 慶応大学言語文化研究所.
- 外池滋生(2013) 「演算子-変項構造と WH 疑問文」「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」

¹⁸ その後、「カ」の移動は、選言関数として、命題全体を引数にとるために CP 指定部に移動するという考え、それはもう一つの報告書「多重 WH 疑問文の扱いと島の制約」として本報告書に掲載されている。

研究発表会（2013年9月2日、国立国語研究所）

外池滋生(2014)「演算子-変項構造とWH疑問文」平成25年度研究報告書『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究』（1）21-48.